さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ

すなっぷ

自分らしさを生かして自立の道をきりひらく

群馬県立盲学校

視覚障害の世界に踏み込む

私たちにとって盲学校の取材は初めての経験です。視覚障害の世界とはいったいどのようなものなのか？読者の皆さんに何を伝えればよいのだろうか？そんな、疑問とも不安ともつかない思いに身を固くしながら昨年の１２月、冷たい雨が降る中、盲学校を訪問しました。まずは取材陣を迎えてくれた長井榮子校長先生と町田英之教頭先生のお話から紹介します。

基本情報

群馬県立盲学校は前橋駅の南口から南西の方向に１キロメートルほどのところにあります。今年度、幼稚部から高等部までに５１人の幼児児童生徒が在籍しています。およそ６割の３３人は学校に隣接する寄宿舎『六星寮（りくせいりょう）』で利用しています。

相談機関の役割も果たす

平成１７年度より「視覚障害支援センター」が設置され、以後、県内の視覚障害のある方々に対する支援の中心的な役割を果たしてきました。例年１０００件前後の相談があるそうですが、今年度はすでにその件数を超えているとのこと。

生まれた時からの弱視や、ほとんど視力のない子どもの保護者からの相談もありますが、成人するまで視覚に全く異常がない生活を送ってきた人が、突然に視力を失って途方に暮れているという相談もあります。どちらも取材陣にとっては想像を超える苦難の世界です。相談はその不安や絶望と向き合うことから始まることでしょう。相談業務の重要性をあらためて認識しました。

最近、相談にきた 40 歳代の男性は、病気のため失明してしまったが、まだ働かなければならない。そこで、盲学校の専攻科で鍼･灸･あんま等の技術を身につけ、仕事として生計を立てていきたいと、入学試験を受け、入学したケース

もありました。突然降りかかった苦難にめげず、家族とともに障害を乗り越えてほしいと願わずにはいられないお話でした。

そのほかに病気や事故で失明する成人の相談事例も多いとのこと。私たちも失明の危険と隣り合わせの生活をしていると言って言い過ぎではないと思いました。

学校生活は歩行訓練から

取材を予約していた私たちのために教頭先生は歩行訓練の見学を予定してくださっていました。しかしあいにくの雨のために叶わず。校内見学を始めながら、訓練の意義や様子を語ってくれました。

視覚障害者にとって家の中はもちろん、街中に出向くときの歩行には大変な困難がともないます。だから足元や周囲の状況を判断する能力の養成は盲学校の学習の中で大きな位置を占めます。校内の廊下には点字ブロックが敷かれ、曲がり角や階段にはそれを示すサインとなるブロックが設置されています。

校地の周囲を囲む塀にはステンレス版が張り付けられていて、これを頼りに辿ると安全に一周することができます。電車を利用して前橋駅から学校まで徒歩で通学する生徒のために、路上に点字ブロックが設置され、生徒の安全な登校を支援しています。

学校付近の道路の点字ブロック

環境を把握する力

さまざまな支援を受けながらではあるけれど、子どもたちの学校生活への順応はとても速いと教頭先生は感じています。「校内での生活を見るかぎり、まるで周囲が見えているようにふるまっている子もいます。校内の曲がり角や壁を触れずに距離感を感知して、スッスッと歩いて行く全盲の子もいるし、教職員が近づいてくると足音で人物を特定する子もいます。」と。

そんな話を聞きながら、私たちは５時間目の授業を見学するために校長室を出ました。

スキンシップも生活力を高める

幼稚部で

幼稚部ではすでに「帰りの会」が行われていました。全盲の幼児一人に対して複数の職員が清掃指導や歌唱指導をしていました。そこにあらわれた教頭先生に「誰でしょう？」と尋ねられて、近寄って教頭先生の首に腕を回した幼児がためらうことなく「教頭先生」と答えたのです。この光景を見て私たちは、子どもが持つ優れた感覚と、健常者と言われる人たちが、文明の発達とともに失ったであろう能力のことを思わずにはいられませんでした。

スイートポテトの甘い香りが漂う調理実習

中学部の調理実習

さらに進むと中学部の生徒全員で行う交流会、調理実習をやっています。７人の生徒たちが楽しそうにスイートポテトを作っています。焼けたスイートポテトに顔を近づけて匂いを嗅ぐ。「ううん、いいにおい。」臭覚は世界を知ろうとする時に強力な手掛かりになっていることでしょう。

高等部普通科の国語授業

高等部１年生の教室では「基礎国語」の授業が行われていました。こじんまりした教室に男女二人の生徒が机に座って先生と談笑しています。「･･･ほら、昼休みの放送、聞いたかな？」「聞きましたよ。」「だろ、あれはやっぱりそうなんだよ」、となにか楽しげに対話しています。先ず教科書に入る前に気持ちをほぐすように日常の話題などで、やり取りをしているのだと、あとで教頭先生が教えてくれました。

やがて授業は谷川俊太郎の『春に』を題材に進められていきました。「『この気持ちはなんだろう』ってどんな気持ちかな」と先生が投げかけると「燃えるような想い・・・」と答える。楽しそうに対話が進む。「対句法は・・・、倒置法は・・・」。う～む、取材班も悩むような本格的な授業です。「じゃ、○○さん読んでくれますか」と先生が促すと、女子生徒が人差し指で点字教科書をたどりながらよどみなく読んでいきます。「よく読めましたね」と先生がほめると「だって前に一度読んでいますから」と当たり前のことのように答えました。点字をこれほどすらすらと読む場面をはじめて見た私たちの驚きを想像してみてください。でも、ここまでの努力は並大抵のものではなかったことでしょう。

点字で詩を読む速さに驚かされました

高等部普通科の数学授業

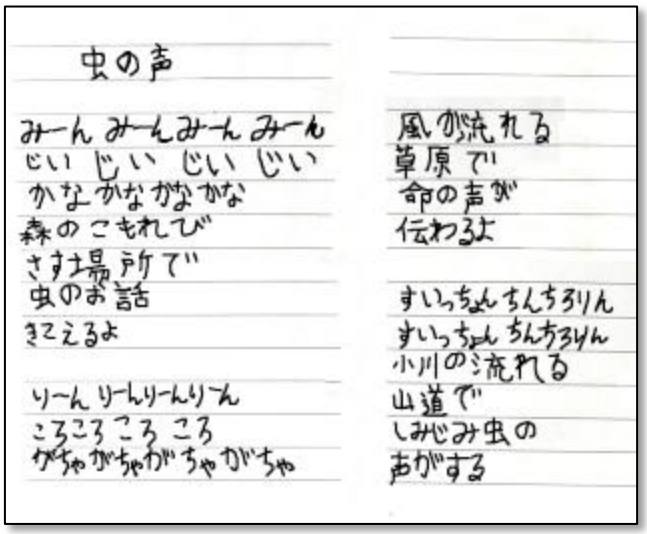
次の教室では一人の女子生徒がホワイトボードの前で先生とやり取りをしています。「10 個の球の中から 2 個取る“場合の数”は・・・。“組み合わせ”だから${}_{10}C_{2}$で、計算すると・・・・・」と先生が問いを言い終えないうちに「45 です」と答える。「お、計算すばやい！」と思わずうなってしまいました。「数学Ａ」の「組み合わせ」の授業です。よく見ると生徒は左手に何か持って白板の方を覗いています。小さな望遠鏡、めがねの望遠鏡版です。そうなんです。必要な手立てを用意すれば通常の授業が成立するんですね。「ＡとＢは同時に起こらない、これを背反というね」「ハイ」。「２の倍数と 3 の倍数は･･･」「･･･3 通り･･･」とやり取りが続きます。教師と生徒が学びの世界を共有している一つの空間がそこにありました。それはとても豊かな空間でした。

使用されている教科書は通常の倍くらいの拡大版。活字も大きくなっています。机も天板が 45 度ほどの傾きを維持しているので前かがみになって覗き込むことなく教科書を見ることができます。これも豊かな空間を構成する仕組みの一つです。

校内に展示された作品群

校内のあちこちに幼児児童生徒の作品が展示されています。焼き物、木工、書道、美術、詩などさまざま。視覚障害による物足らなさはまったく感じられません。イマジネーションの豊かさと、丹念な構成には目をみはるものがありました。そのどれにも、ものを作り出す力が満ち溢れているように思えました。写真ではなかなかその迫力が伝わらないかもしれませんが、しばしギャラリー散歩をお楽しみください。

光、形、色、命を素直な言葉でみずみずしく描写する詩に心打たれる



虫の声

みーん みーんみーん みーん
じい じい じい じい
かなかなかなかな
森のこもれび
さす場所で
虫のお話
きこえるよ

りーん りーんりーんりーん
ころころころころ
がちゃがちゃがちゃがちゃ

風が流れる
草原で
命の声が
伝わるよ

すいっちょんちょろりん
すいっちょんちょろりん
小川の流れる
山道で
しみじみ虫の
あがする

きゅうり

ふわふわ軽い/土からのびた/長い長いつる/
その先に/トゲトゲの実が/１つ/
その名は　きゅうり
たわしのように/ザラザラした/大きな葉っぱ/
手のひらを広げて/太陽の光を/受けとめる
冷たい水と/栄養いっぱいの土と/強い日差しを受けとめて/ぐんぐん育て/みずみずしくて/
おいしい　きゅうり

高等部専攻科の実習授業

高等部専攻科では、将来、針・灸・あんま・マッサージ師を目指す生徒のために充実した実習が行われていました。先生が被術者になり、細かい点に及んだ助言を与えていました。

技術を身に付けた学生さんたちは、外部からの希望者に対して授業の一環として施術しています。ぜひ利用してください、とは教頭先生の言葉。関心のある方は学校まで問い合わせてください。

学校の教育目標

プレイルームが最後の見学場所。ボールプールがありました。解放的な感覚が得られる遊具です。そこを出ると廊下に教育目標が貼ってありました。

① いきいきとたくましく生きる力を伸ばす。
② 互いに理解し合う心の豊かさを育てる。
③ 自分らしさを生かせる知識と技能を身に付け、深める

学校目標はどこの学校でも見られますが、校内見学を終えた私たちの目には、盲学校で学ぶ生徒たちにとって、まさに生きて行くために欠かせない力につながるものだと感じました。

自分らしさを生かして

再び校長室に戻り、校長先生、教頭先生と意見交流の場を持ちました。盲学校で学ぶ幼児児童生徒の姿は生き生きしていますが、気になるのは卒業後の進路です。そのことについてお聞きしたところ、ハローワークなど、公的な機関と連携してあらゆる可能性を探っているけれど、進路の開拓は容易ではないとの答えが返ってきました。しかし、前橋市役所や大手量販店が視覚障害者専用のＯＡ機器を用意するなど、障害に配慮しながら採用してくれた例もあり、希望ももてるとのこと。企業や事業所の理解を得るには、学校関係者が積極的に活動していく必要があると意欲を示されました。それから校長先生は「歌手の清水博正さんのように優れた才能を持つ人のような例もありますが！」とにっこり笑って付け加えました。たしかに視覚に障害のある人たちが健常者にない優れた感覚をもつことは間違いのないことだと思いますが、それがすべて職業につながるとは言えないのでしょう。したがって、視覚障害があるという現実を受け入れながら､『自分らしさを生かせる知識と技能を身に付け、深める』ことが教育目標として重い意味を持つのでしょう。

マッサージ実習は真剣そのもの

寄宿舎訪問

今日は寄宿舎六星寮でクリスマスパーティーが開かれる予定。(六星＝点字) パーティーには参加できませんでしたが寮内を見学させていただきました。

小学生から高等部の生徒まで３３人が共同生活をしています。多くは２～３人で一部屋を使いますが、成人になると一人で生活することもあります。食事は当番制。家庭を離れて年齢の異なる人たちと生活することは、これも社会生活に向けての大切な訓練になるのだそうです。この日はパーティーの準備に追われる寄宿舎生たちが忙しそうにかけまわっていました。

部屋の入り口に小さな鈴が下がっていました。一人一人が自分の鈴を下げています。なんのためでしょう？・・・音を聞き分けて自分の部屋を確かめるのだそうです。すごいですね。

食堂の入り口に貼ってあるメニューやお知らせの掲示は黒い紙に白いペイントで書かれていました。弱視の人に少しでも見やすくするためです。いろいろな工夫があふれていました。

校長先生にメッセージを寄せていただきました

打って出る盲学校

校長　長井　榮子

「校長先生、この前初めて会った人に、『目の見えない人って自分でご飯を食べられないんでしょう？』って言われたんだよ。ショックだったよ。」小学生の女の子が寂しそうな顔で言いました。盲学校の児童生徒は、ほとんどが給食は自分で食べ、準備や後片付け、掃除も自分達でしています。『私達が動かなければ!』と、あらためて思いを強くしました。

私達の願いは、障害の有無に関係なく互いに思いやりの気持ちをもち、自分らしく生き生きと生きられる社会の実現です。

そのためには、幼児児童生徒が生活力を身につけることはもちろんですが、社会の人達に視覚障害について知ってもらうことも重要です。そこで、今、2 つの方法で取り組んでいます。①学校からの情報発信と②学校から外に出る体験学習です。報道機関等に、盲学校で学び生活している幼児児童生徒の様子をできる限り多く情報発信し、「盲学校においでください」と呼びかけて、頑張っている幼児児童生徒を見ていただいています。

また、日々の生活の中で互いの存在を認め合えるよう、私達から積極的に出て行く行事を取り入れています。普段の生活の中で、直接触れ合い話をすることが理解するための第一歩と思っています。

この記事を読まれた皆さん、ぜひ盲学校においでください。

取材を終えて

授業の密度の濃さを見て、展示作品の豊かな表現力に接して、足音で職員を認識する子どもや校内の壁を触れずに認識してスッスッと歩いて行く全盲の子どもの話を聞いて、障害があるとないとを区別することの危うさ、あるいは無意味さを強く感じました。また、視覚以外の感覚を磨くには想像を絶する用意と工夫が必要だという話に、現実の厳しさを学びました。ただただ、視覚障害者と職員の皆さまの日々の努力に頭が下がるばかりです。

お忙しい中、私たちの取材を受け入れてくださった盲学校職員の皆さまに心よりお礼申し上げます。実態を十分に報告できなかった部分があるかもしれませんがお許しください。

なお、「障害」の表記については様々な意見がありますが、ここでは盲学校での用例にならって「障害」としました。

《取材・撮影・文責：金井秀行・倉林順一・坂田尚之》